畧譜 春

共四

吉田

二百十一冊ノ内

内閣文庫
和書
類 三六〇八八
號 二一一
冊
架 一五六 九
一七冊

392

内閣文庫
番號 和 36088
冊數 211（71）
函號 156 17

高七百石
家紋 三重扇地紙内ニ[illegible]
角四目結

記録御用所

源姓
吉田

佐々木秀義六男近江國吉田領し
吉田五郎左衛門尉厳秀九代左馬尉
光秀醫術を習ひ永享年中
武門を辞し所地ハ族へ譲り[illegible]
薙髪して仁庵徳春と改め山城國
嵯峨角倉ニ卜居せしか室町将軍
義教公へ召され侍醫となり山城

閣
392

関谷邑を領ス法印ニ叙
義政公ニ而勤仕應仁二年八月廿
七日死ス四十五歳ニ而子済舟法印宗
林應仁二子年八月父か跡を継
室町家の侍医ニ而法印ニ叙
義政公より　義植公ニ而勤仕し永正
十二子年致仕し　天文十二卯年
十一月十日死ス九拾六歳ニ而子靖節法
印宗忠永正十二子年家督して

室町家の侍医法印ニ叙セられし
義植公より　義晴公ニ而仕ふ天文元辰
年致仕し永禄八丑年七月晦日死
七拾五歳ニ而子玄庵法印宗桂実ハ
次男ニ而兄光信病ニ而就居ニ付而嫡
子ニなり天文元辰年父か跡を継室
町家の侍医となり法印ニ叙し
義晴公ニ勤仕天文八亥年遣明使僧
天龍寺策彦ニ同船して明朝ニ到り

入学して彼国ふして治療の術をまなひ
時人嘗其術の妙を称して三方加産と
いふ称号の二字を大書して贈る寛永年中ニ
至りて同十二卯年帰朝せり同十六
未年再ひ明朝へ渡海せし時
世宗皇帝ニ謁し有命を蒙りて診
脈して薬を献し目出度平安ならしむ
其賞として顔輝秋月の画に笛鶴の像一幅
花梨果菓葡萄螺鈿の菓盆同画幅

寵一

光寿　宮内法師 知名 四郎右衛門尉 号 徳春

天正元年近江ニおゐて生る父之家号
富田屋と云五字所職給ふ寛永年中法印応永
年中故有て領地を一族に附属せしむ寛
祖左衛門尉末廣寿の伝来の甲冑指物
等を携来て去る武蔵江落縁角倉
退隠閑居慶賀寛永年精進清[illegible]

其州之上旅郷里ニ而 諸州之名并高寺
此ノ月 其宮寺殿ト 吉閑段ニ出 長ニ出加
侍醫ニ出 直敘宮内卿法印 於山城ノ紀伊
郡猪熊郷ノ内 寺邑之代拂し 其子トス
号養法印 德春院ト 〇應仁二年八月
十二日死 行年五十歳 山城之深草二尊院
ニ葬

宗林
民部卿法印　民部卿　隠居 済舟
應仁二年家督 室町殿侍醫 直ニ民部卿法
印〇永正十二年 以後家督 協德院ニ 退去
隠居〇天文十二年十一月七日死 行年九十歳
葬二尊院

宗忠 初光信

宮内権少輔 初名 景次 宮内少輔 号 靖節

永正十三年家督室町殿侍医直ニ宮内
権少輔○天文元年隠居○永禄八年
十月晦死七拾五才葬二尊院

宗桂

宮内権少輔 初名 景次 宮内少輔 号意庵

天文元年家督室町殿侍医直ニ宮内少
輔○同八年遣明使天龍寺策彦和尚下
同渡明朝ニ其城留学居テ所彼國
治験多有之時人賞其功之所意庵
ト号ス称古昭ト其有廿五梅崖ト人称
意庵之二字ニ書古額（林黒霊隷字一枚紹書一枚今以傳来）五年
留学○天文十六年帰朝○同十九年
再度明朝ニ渡海其節彼國世宗皇

帝御脈一日診脉奉進献不日二御平安

一日恩賞顔輝筆扁鵲掛物一幅花瓶

文臺硯螺鈿之藥筒元板聖濟總録

一部唐墨一挺賜之三字年當居（鑑物今在傳本）

○天文十九年歸朝○永禄八年退去

閑居○元亀三年十月廿日死去二稀壽年

葬二尊院　（永正九年壬申生　元亀三了丸八才）

前文之

總録一部 薬器二百匁 備之 二十年 留

居し 同十九戊年 帰朝し 永禄八

丑年 義輝公薨去の後 隠仕しく

元亀三申年十月廿日死去稀之果

〔宗〕二男

吉田宗安法眼（四）　（二 宗慶）

宗恂（初名光政　一稱意卯　三歳弥六　北玉民部分法印下）

兄光好生質頗粋他稱之号之好醫

業を嫌ふより宗恂嫡子ふ云ふ元亀

常御脇診脉 業 進献 元和三年安
一才 恩賞 顔辨 筆 扇 鶴 掛物一幅 花瓶
文台 香合 螺鈿 薬 元祐聖済總録
一部 董墨一挺 賜之 三年 留居 鐵砲人名 傳奉
○天文十九年 歸朝 ○永禄八年 退出
同居○元亀三年十月廿日死 七十三歳

前之し
總録一部 二分 年 同居
居し 四十九歳年 歸 永禄八
壬年 義輝公 蒙 の 後 仕し
元亀二申年 十月廿日死 七十

二男

吉田宗安法眼 四
二 宗虎

宗恂
初光政 一 瑞 法印 三 長 五 民部 法印
兄光好生質 好 他 好 醫
業を 小 宗恂 元龜

著述書

一 古今醫案 三十巻
一 藥性集類 十八巻
一 増補醫經溯學 十二巻
一 本草序例抄 七巻
一 素問講義 十二巻
一 難經注疏 四巻
一 名醫傳略 二巻
一 醫方大成論抄 一巻

之申年家督ニ立テ稱〇天正十三
酉年秀吉公ニ召出サレ侍醫トナル
法眼ニ叙シ山城國ノ内ニ於テ百石ヲ賜ル其
後仰ヲ蒙リ御薬ヲ調進ス〇之後秀次
ニ属シテ新恩六百石ヲ賜フ〇文禄四乙未
年秀次公薨去ノ時新恩ノ地ヲ返シ
仕ヲ辭シ幽居〇慶長十年
後陽成院御悩ノ時関白ヨリ召サレテ藥ヲ献ズ
御平安ニヨツテ叙爵セシメ延寿院ノ字ヲ

賜ハル後ニ一條ノ綸言ヲ蒙ル法印ニ叙
セラル
東照宮 台徳院殿ヘ召出サレ侍醫トナリ
旧領其外ノ地米ヲ賜リ駿府ニ在リ
台徳院殿江府ニ於テ御不例ノ時江戸
ニ住シ駿府ニ帰ルニ其上須紫雪調合ヲ
命セラレ米ヲ賜フ法方並ニ和剤
局方ノ書ヲ調進シテ叡感ヲ蒙ル〇其後
光明朱ヲ求メ[illegible]法印宗[illegible]明[illegible]

寶永二年朱砂を献し称美せられ又朱砂
を長崎へもちきたれる後根の朱砂相渡へ
しと唐船へ命せらる○三年より貢へし
名を玉石なとゝ称されし名を[illegible]
枝瑪瑙[illegible]
[illegible]
珊瑚唐船より献し[illegible]
御の人[illegible]宗恂枝
珊瑚[illegible]

し[illegible]歳の頃大珊瑚[illegible]枝[illegible]
小瑞の大男[illegible]
○其[illegible]
○[illegible]年[illegible]病[illegible]
[illegible]月十七日死[illegible]

宗誠 芸州 採貌
紀伊殿[illegible]
二百石○實[illegible]

具子保安宗策
[illegible]

宗皓 和宗達
父宗恂病の間
[illegible]

杂 山城國二[illegible]院
吉田意安 宮内法印

○天門根部ニ而側ニも
堅性之由ニ而…
詩作妻ニ上手ニ而…
言ふ家祖ニ而…
壱ヶ巻…

著述書

一 喜氏家傳秘方 壱巻

一 本草和名 二巻

一 醫學類聚

一 こゝにて父家業の事ハ家筋相続いたし
是ハ長十三戌年頃…元安之故
東小田例ニ仕形普…
東照宮ニ絶子十巻…一部
台徳院殿へ南京秘本…
其後…広東秘抄…
御…所ニ倫子三…を献じ…府ニ
台宅の…父清…家…遺抄献…
御…

全…
…

東照宮ニ杜氏通典一部 奇效良方一部
台徳院殿ニ千金方一部を献し同十八年
清…ニ…依…元和
二庚午年
東照宮…御…旧
宅ニ…同三巳年江府へ…候
相…紙今…献し左府中…
旅…枝…同巳年…附
服之今二枚…
[illegible]

同七酉年於材木町中風を病し參府
せず同八戌年六月廿七日死ス二拾九歳
二尊院ニ葬

一著述書
一診脉撮要 一巻
一明醫聚方

宗恪

吉田宗恪 宮内 法印 後仕 紀伊院
一岩麿 二寛日 三意安
元和八戌年京都ニ於て吉田意安
安ニ従ふ○同九亥年參府
台徳院様御代ニ而献上仕候ニ而御目
見被仰付候而上意ニ而御脈
拝診仕今ニ至役候○寛永三年

台徳院様御上洛の時ニ而御供致出仕
行年の先も於侍○同四卯年參府御留
御在京之法印罷下五年始之節加増被下重継
ニ成り其後方々代献上流御脈拝診仕候
候二代之者共も重継法印ニ
列ス在○同六年御脈 濱年○同九申
年
台徳院様薨御ニ付御法事○同十酉年
大猷院様御代ニ相仕江戸ニ而宅地を拝領○

〇正保四年
大猷院殿御扉絵之節
同御筆ニ而章延御手当
了候ニ付而小袖唐衣
並棚金百両ヲ下

同十七辰年ニ記〇同二十未年五月酒井
讃岐守ニ従ハ日光御宮へ参〇正保
元甲申年法眼ニ叙〇慶安辛卯年
大猷院殿薨御の後ニ而初任の御尊像
元辰年
厳有院殿御代ニ記〇同二午年九月
西尾丹後守より彫刻ニ治済と云ふ
さ越別田中ニ記〇万治二亥年
厳有院殿御前ニて御自画神農の像ヲ描

〇同三子年高麗国朝鮮へ命を受ける
人参麝香麋角ハ高麗と開く縁あり
の産物ハ多くより百く別ニ有ゆる名産
文元丑年七月水戸中納言殿より
常陸ニ水戸人為珍勝をもりて大切より絵
業を謹ミ同三卯年正月日光へ使者
〇同六午年正月より自筆詩句の自
画旅行年極〇同八申年八月上京乃
比勝下より大地院宗旧と付し同年冬京

府○同十弐年加賀国弐百石○同十三年
老母の病により上京の所御暇を賜り登京し
く之日録ハ京ニ至り同年御府○同十二
子年御前にて御目見太守に自画
人麿の像を奉る○延宝元丑年
中え江戸に御下向の節に上京を歎に年去
く御暇之白銀弐百枚賜○同二寅年
十二月
巌有院殿に御目見く附に上京を歎に渡金子

附物探幽筆之三幅対掛物金子百両賜
○同八申年
巌有院殿薨御の後に江戸へ参勤仕○同年
七月四日に尊之御前に於て御扇子に御自照于院家
自画讃人の御威儀并掛物に冠棚御花入
御子に文殊白緞子一巻并蒔絵一揃合
唐草一箱賜○同九年十日
常憲院殿に御目見之節御側衆御前にて
又ミゝ之御書を老中へ相渡候へ御例之如く被下候

宗栢坂上池院始宗於四義に宗栢と池
院は武田自楽書院ニ於テ礼○同年八月京
へ帰り老母死去ニ付墓参の為帰り
時指之令之於テ礼院職二当院ニ参る
○天和元酉年 同月朱府○同二戌年
十二月十八日老免之後仕時指令参致紀伊
院と称○同三亥年 八月ヨリ家督ハ相続
京都ニ帰り○貞享元子年 五月ニ撰
紀州府撰○同年九月廿九日死七拾弐

第二節 侍医等

○○

吉田意安 宮内卿法印 三宮内卿 三意安

宗恬 初宗運 一岩磨

延宝元丑年十二月廿六日拝礼初
見○天和二戌年九月朝鮮人来聘
の時往きて筆談す彼國の醫官鄭
東里等と筆談す○同年十二月十八日
大御番法印並ニ被仰付○同三亥年
七月朔日ヨリ別而御用ニ今村病ニ付

著述書

一家秘約囊方 一巻

一飲膳摘要 一巻

一懐巻鍼灸書 一巻

一諸方考異 一巻

より同夜数足下申付候御診脈之事と兼
へ足位つヽきニ付御府〇貞享三寅年
十二月廿六日法印〇元禄二巳年正月
八日出仕勤仕〇同四未年十二月廿七日高料三百俵ニ成 同五申年二月廿八日出既
〇同十六酉年九月十一日病死〇宝永六丑年
正月当時御表法印法眼医師共ニ以て尤
半井驢庵今大路道三竹田法印意安
法印以上ハ格別ニ付御目見出席ニ定〇
正徳二辰年九月

久阪浅庵御側ニ付診脈同十九年ハ
於診脈之業勤て仰付られ候處辞退〇
享保二酉年十二月廿二日出御番仕〇
同三戌年出既〇同年正月十一日先祖
家様天文年中明朝より携渡し
扁鵲の縁称意の二字上縁ニ伝へ
しかるハ掛物ハ出来息の出来掛られ申候所監
瀬ニ出候ニ付様ニ付御目見出候様大
ふく彼方切取持仕候ニ出来候上之

公著述書
一 重編本草記 一巻
一 方制考 一巻
一 仁學餘意 一巻
一 韓客筆語 一巻
附田順餘稿

口宝永七寅年十月十三日国光院
壽信養子成○
宝暦十年十一月晦日
隆吉病卒

を拝受○同年朝鮮国より献る人参二斤
拝領○同女子年巳月巳日死亡 拾四歳
江戸芝金地院ニ葬 二尊院ニ墓ヲ建

宗怡
吉田宗牧 小字 心牌
元禄四年十二月初九○正徳元年十月朝鮮人ニ弾事筆談
病により死去
享保四年

口宗恰
二 甫庵
吉田宗恵女
三 式部
初 拾吉
享保五年七月朔日御目見 二宗恵女を没
○同八月十一日初入○同八卯年五月廿九日

死去拾四歳 金地院ニ葬

宗愉
吉田周竹 宗恵二男
吉田宗恵女法印 初 権之助 周悦
如喜
享保八卯年五月若君様○同年八月之
日大御番法印並宗恵女を没○同時九日初
入○寛保元酉年十二月廿九日法印下○
延享二丑年二月十五日紅葉山法会八
講小子彫之来拝○同年十一月二日
将軍宮下山鎮武之人様之御会始叙授

著述書
一 象傳小品方 一巻
一 括要經驗方 一巻

其後依例ヨリ元禄○月ニ宿直年十一月
晦日就職　上総之陪臣○寛文元辰年
六月朔日御辞之付役替ヨリ寄合結構
貫元ニ出仕○同ニ年十二月十九日琉球人
出之節附出仕寄合組ニ被○宝暦十辰
年　御持任　御薬任　指揮　宝暦十六
寄合格ニテ元禄御伝縁ニ代ル後○明和六丑七
年十二月晦日御役仕如春ニ後○安永
三年正月二日死七拾三歳　門寺葬

四二男別家領○寛延三年十二月
十六日相続○明和三年十二月
二十四日年寄[illegible]

○
秀成　右近　右京　式部々　吉田八兵衛　法印　三[illegible]　多紀[illegible]　初金蔵
宗惲　　二彦三郎　[illegible]壹安
高七百石
二男相続○宝暦七丑年十二月朔日
初見○明和六丑年十二月晦日相續
法印並連[illegible]安永○安永九子年十二月
将軍家御医師格ニ命セラレ[illegible]
比兵法印ニ補シ寛武日出礼七八ヨリ新
古ヨリ法印醫官ノ次ニ[illegible]ヘシト定メラル
宗惲ハ二代ヨリ代々法印並席ナリ

次□□同七年七月廿七日□□□□□
□□□□□□天明元丑年十二月十六日
法印□□同七未年四月十五日
将軍宣下□□式□絹奴袴□□□
出□□□□○寛政二戌年十二月五日
隠居□□□□□楽□□○寛政五年
六月八日□□年三□□□□葬□寺

宗脩（ナガ）　式部

一　七□□迄

二　□部

天明四辰年十二月□□□部之○寛政五年四月四日
家督□□□□

源姓

高五百石
家紋　三□□紙内□□　角四目結

吉田

一条左大臣雅信七代佐々木源三秀義
六男近江国住人吉田左衛門尉厳秀十一
代靖節法印宗忠孫吉田真如院
法眼周三嫡男

宗活　吉田桂庵

玄岡秀吉の侍醫□□以後□□部□

何辰亥方の御用を勤む○元和三巳
年秋松平越後守三歳の時越前へ
赴く大病の刻京都の所司板倉伊賀守へ
奉書を以御付として遣し越前へおもむき
療治せしむ越後守本復して後六年
越前の国へ仕来し越後守七歳の時
御国地へ下向の時同道
台徳院殿へ拝謁○寛永三寅年
明正院様御幼年の時御悩に付京都へ召

登りて御薬を献じて御快全を得られしより
より浜橋に命ぜらる○同十四丑年三月
千代姫君御療治○同十八巳年八月
厳有院殿御誕生の時御匙役○同年九月当
松平越後守方へ上使にて松平伊豆守
をもて職を賜
厳有院殿に附させられて思召に依て御供せられ
武州忠須の内に於て采地五百石給ふ又
同年十月廿日御城にて中風にて

退出す病中武田道安羽生玄昌宇木玄洞
脈薬仰付らる○同月廿八日死す年七十一
赤坂松泉寺に葬る

宗叔
三男
吉田策庵法眼

東叔死去あるの旨上りしまゝ石をもって
其家督五百石○寛永十九年此例醫
仰付られ其人見玄徳阿部長徳院と合

御薬のことお後御平生御保養お役
よる○正徳亥年まで六ヶ年勤仕
大猷院殿御前にて召され御懸りこの命下
ことなる○同年
常憲院殿附させられ此館役
厳有院殿御例醫兼勤○慶安時服銀を
賜ふ○寛文二寅年館林の御城にて
られし時策庵五百石は嫡子東庵
に給ひ御加恩して召出され寄合策庵

御小納戸七十人扶持拝領御側醫○同六
午年十二月廿八日法眼○靍姫君御附
清涼院殿御薬差上ル○天和三亥年
十一月廿一日老衰致仕○元禄七戌年九月
十二日死去七十九歳赤坂松泉寺ニ葬ル
常憲院殿御自筆御画幅頂戴

宗周　吉田意庵　喜安
寛文二寅年館林ニ而御城地

常憲院殿御入国之節被召出御切米百俵
七十人扶持被下置候御番医被仰付
御匙被召出候御寄合退被仰付○貞享二
丑年五月廿八日死去同寺ニ葬ル

宗亨　吉田[redacted]　集元
家督被仰付○元禄三午年九月家業
不勤ニ付追放○同五申年追放清白之

宝永七年九月十六日
三拾人扶持被下○正徳六申年三月七日
死す同寺に葬る

宗質　吉田益之助

家督○享保三戌年六月廿二日死去十七歳
以下ノ月家絶

宗知　宗以三男　吉田周竹　始　甚太郎

父家督七十人扶持被下置候○貞享二丑年正月廿五日寿姫君附
その時七十人扶持を三百俵二十人扶持ニ
被改候て御入要借来○
常憲院殿月次御講釈の節毎度拝聴○
瑞春院殿御殿にて
常憲院殿御前へ度々召出被賜物ありし○

露姫君御疱瘡御快然ニ付
加増二百石○二十ヶ年相勤候ニ付褒美
あり○露姫君御早世御無拜領○御遺
其の後享保元申年正月廿四日奥右
○同五子年十二月二日松平英之助宅ニ
御成の刻正之御座所御給拜領ス○
同九年同所へ

文昭院殿御盛の御時の○宝永七寅年
十月廿六日二ノ丸ニ而御用ニ而相勤

上意の旨大久保長門守宅ニ而被申渡之　同人
中奥守○周竹嫡子周栄病身ニ付嫡子届二男
周悦ハ十一歳ニ而成後ニ寿成と改着ス
且亦家業相続のため同姓一席二男
宗仲儀養子ニ致シ置候正徳二辰
年四月五日養子ニ宗仲儀

文昭院殿ヨリ御匙ニ罷○享保八卯年
二男周悦来ル周竹家相続為仕ニ付
其外同姓三益安方元一新ニ

嫡家ニ并家督之ヲ被仰付〇享保九辰年
七月十九日致仕〇同十五戌年十一月十一日
死す七十七歳本所松泉寺ニ葬る
常憲院殿御自筆御能幕下石菊拝領西丸姫君御方御自筆宗知像画頂戴

宗仲　吉田策庵法眼
実ハ吉田一庵法眼宗貞二男
養子
家督相続〇享保十七子年十二月十六日
表御番医〇同十九寅年二月廿六日家業
出精ニ付被仰付して御番医師被仰付〇元
文二巳年四月四日
大御所様御匙被仰付〇西丸御側御医師〇同
年九月廿七日山王御宮御参詣供奉〇同
年十二月十八日法眼〇同四未年六月廿
三日御匙御役〇寛保二戌年六月朔日
死す七十七歳同寺ニ葬る

宗之　吉田策庵　図悦　後改 休山

高賢　彦（?）

宝暦九年十一月廿九日清水宮内卿殿ニ被召出
十五才より……

寛保二戌年八月ニ而家督　寄合○延享四卯年八月田安少将殿御用○明和三戌年四月ニ而致仕○安永八亥年正月廿九日死去　年三十三　同寺ニ葬る
同月十三日御目見

宗翼　吉田周伯　群次郎

明和三戌年四月ニ而家督　寄合○同六丑年六月廿四日死去　二十四歳　同寺ニ葬る
同年十二月廿八日御目見

宗允　吉田栄庵　千次郎　隠居　宗山

実ハ村田長庵法眼致和二男

明和六丑年九月廿五日吉田宗翼之家督　寄合○[redacted]
同年十二月廿六日御目見
天明四辰年四月廿五日隠居
文化九申年六月廿六日病死　年六十一　同寺ニ葬　法名……

宗恩　吉田俊宅　幸五郎

実ハ吉田広庵……賢恕伜

二百石　……

安永元
明和九辰年十二月八日養子○同年十二月廿八日初御目見○
天明四辰年四月廿九日家督○同六年
年十一月十四日御広敷御中猶用○同
年同月廿二日寄合○同八申年十二月
十二日種姫君御守殿女中猶用○寛政七年十一月廿七日死 三十四
一常憲院様御筆 壱幅
一同御画 壱幅
先代の内拝領候へとも今ハ不知

宗豊 実宗元二男 周悦 始 千次郎
寛政七年十二月三日家督○同八年八月十二日初之

高三百俵
家紋 [illegible]内藤桔梗草
角ニ三ツ目結

源姓
吉田
清和源氏秀義六男吉田六郎厳秀後胤 代々近江国小住 吉田繊庵宗活二子

宗和 吉田長庵法眼
寛文六年十一月廿八日新規ニ被召出
奥御醫師○同年十二月廿八日法眼○寛

常憲院殿御筆神農 一幅
拝領
宗和著述書
小児語方 一冊
幼科撮要 一冊

文十年十二月廿八日廩米二百俵下賜○同
延宝元年六月廿一日死 赤坂松泉寺ニ葬 五十九歳

宗通 吉田長達
延宝元年十二月廿八日初而御目見○同年十
二月家督相続○元禄三年九月十九日医
業ニ励ミ小普請入○同七年十一月廿一日
治療のこと研精すへきよし沙汰ありて寄合
○同十一年十二月二日死 円寿寺ニ葬

宗泰 吉田長庵
元禄十二年七月十九日家督○同年八月
十三日初御目見○享保元年八月十二日死 同寺葬

宗義 実吉田周竹宗和四男 吉田長庵 新四郎
享保元年十一月廿九日養子家督○同二年十

一月十一日初見○享保十八年七月二日死 卅歳

同寺ニ葬

宗理

吉田長庵　庄之助

享保十八年十月廿六日家督○延享三年十一月四日初見　天明二年

七月廿七日致仕○寛政四年七月廿七日死六十三歳 同寺

宗純

吉田長達　庄之助

天明二年七月廿七日家督○同五年正月

十日御番醫師○寛政元年十二月十八日

死二十七歳同寺ニ葬

宗祥　后宗禎

実吉田某長庵宗之三男

吉田長瑞　萬三郎　萬悦　長達　長禎

寛政二年三月四日養子家督○寛政九年十二月

三日初見

高弐百俵
家紋 扇地紙内藤菱草
四ツ目結

源姓
吉田

依々東二郎秀義二男吉田六郎兵衛秀十一代徳春九代吉田文安之家養子

父参 元貞法眼
実吉田寺主吉兵衛某長男
享保四年十月帝彰観
ヒ依 父跡寄合医師二百俵
寛延四年十二月十六日卒出
寄合医師ヨリ宝暦四年十二月八日
死七十八 葬下谷之余地院

善正
吉田桃源院法印 之子
姓 亀六
父ハ参り付キ田安卿小普請仕として務

章貞　号寿碩　初寿栄
田安中納言殿ニ歎規　外五人

寛延二年十二月七日剃髪してはしめて出られ
廩米弐百俵を給はり西丸奥医師○
同月十八日法眼○寛延四年五月十四日今
度父に参
大御所方の御悩の頃に命をかうふりしの如く年
老て眼すこしかすみたるに依父に代りて常
に出し診脈所剃髪のことを奉りたるに
命をかうふる

大御所薨御の日にいたるまて昼夜御前に
伺候す○同七月十二日時服銀を給ふ同年
九月朔日父死して家を継寄合に列し
給はる○宝暦二年
大納言家御疱瘡の時十一月十一日より廿二日
御酒湯の儀済むまて近侍し時服
黄金を給ふ○同四年正月廿七日　萬次郎君
生れましゝより給ひ御知行に依て

将軍家乃御憂慮ありて猶生年より
あらん祝ひと名書記しを奉りしと命を
うけ同廿九日男甫居村上良之林牛麻
呂とおほしく一巻書を献○同二月九日先
に二ともとし之遂ニ男君に叶ふ依て
万次郎君御養生のことく次第にもろ
らし座せし御例の如く御悦ありし○同五日
三月朔日　万次郎君御方の御かたちに御元気

よく御遊行なりしを御祝あり
公にも殊の外御喜びのよし仰せられ銀廿枚を
給ふ○同年六月廿五日町屋舗を給ふ○同七
月朔日　御簾中より方書の正統より
いろいろを給ふ所ありて今に御預りし置
かれし御依て今日より御菓子御料を給ふ
○同年十月十三日　御簾中の方御病
気をよく給ふに依て銀巻物等を給ふ○同年

九月七日

浚明院殿御筆神農の像を給ふ○宝暦六年
七月廿一日　千代姫君御誕生に依て御祝
を命せらる○同十一年十二月廿九日より
高田の宮好合庵疾に依て宿直を免され
清水卿小間使御末を兼しを命せらる
同十一年正月十八日御酒湯の事を務るによつて
昼夜伺候褒賞時服及ひ銀百枚を給ふ

○同年八月朔日　万寿姫君御誕生
に依て御祝○同三日同殿よりも褒賞の
御使ありて御七夜の御いはひに時服二合
を給ふ○同十二年十月廿四日
孝恭院殿御髪置大奥にして御儀を勤む
○同年十一月朔日
孝恭院殿御附○御七夜の御祝に時服二
合を給ふ○宝暦十二年八月十四日

万寿姫君御悩とありて迄は篠崎朴庵代
し候ひけると　万寿姫君の御事に朴庵に
命ぜられ無しと命ぜらる○明和元年八月
六日　御基の御方の御かう御所労に依
て御薬奉行命ぜられ同十八日より
御匙も進らせられ迄御病気也御快然に依て
宗匠をも召され朔日御撫を診同廿八日
御病全く癒させ給ひしかば八日に一度診脈
也

可無しと給ひしかば九月十八日御席上銀巻物
を給ふ○明和三年十二月十九日夜々の勤労
を賞せられける
大納言殿の御誕生の日より御薬の事迄
に依法印○同六年十二月七日年老に依て
宗匠と召さる○安永三年九月廿八日
大納言殿にて召されしに生薬をも給ひ御実
の勅の御紋付を給ひ嫁ぎて紅裏の小袖

とゝむる○同六年正月十九日城中帳小
家にてつとむへきむねを申さる○同七年九月十六日
年老と混して當直をつとむへきむね仰をかふる
仕たてまつりし命をうく○同八年二月廿
四日
孝恭院殿薨したまひし後御遺金をたまふ
○同年同月十八日本城の奥医となる
○同年九月十日七十八歳にて死す芝金地院

1.

り 葬

瑞
正秀 実は田安家奥医師吉田元仙が長男
母某 梅三郎 瑞庵
安永五年八月廿二日遺跡
明和四年七月廿四日養子○安永八年八月六日
家督を継○寛政三年九月廿九日医業のため
小普請にうつされ支配に属す小普請医師
寛政○同年十二月十九日死す

高弐百俵
家紋四ツ目結

源姓

吉田 本氏佐々木

宇多天皇九代山城国佐々木三郎秀義六
男厳秀 後号吉田六郎法橋 山城国西岡嵯峨ニ住 十一代之孫徳春之
九代之孫吉田文安光玄養子
実ハ近江国ノ住 石田弥太郎男 吉田元卓法眼 今三郎
之参
享保十年八月廿八日浄福ゝ於○同年九月

廿一日内藤伊勢守病ニ依て越後国村上へ
赴き治療致すへき旨命せらる○同十六年七
月四日井伊掃部頭池鯉鮒駅にて病ニ依治療
を命せらる○同十八年九月十一日　御簾中の方
診脈を命せらる○元文元年六月廿井伊掃部頭
領地にありて病にかゝられし時治療を命せられ
江戸へ登りし時神奈川駅にて掃部頭卒せしに
依て帰府○同三年二月廿九日日光准后宗
保院殿診脈御薬を奉る○同二年九月十六日
新に百石出され廩米二百俵役料一百俵と為らる
田安附○元文六年二月廿七日　天英院殿
御不豫の時診脈○寛保元年六月二日大人
浦尾病に依て治療のことを奉はる○同二年
十二月廿一日法眼○延享二年九月十四日西丸
後閣の人々の治療を命せらる○同年閏十二
月十日　利根姫君御産の後にて病を

らせ給ひし時　大御所より脈のことを
命ぜられ○同三年正月朔日御当家御代々
御手自末広を給はりしに自より末広を捧
きたりし例を蒙りて後宗哉ハより末広
おもくとあやしみ給ひしが続あらためて宗哉ハより
給はりし此茶碗をも給はりし○同年十
一月十七日　大御所御不豫に依て診脈を命ぜら
る○同四年九月九日紀伊大納言　御病

あまて日を経てまうらせ給ひしかバ十一月十七日
に参て治療せよと命ぜられ巳に病癒えしを給ふに依
て明る正月廿九日時服三を給はりて賞せらる
○寛延元年正月廿四日　大御所御不豫に
依て廿九日診脈せよと命ぜられ五月四日再御脈
を診同十四日西丸御匕と命ぜらる年老に依
て辞しやといへども御由なしされども
年老たるて切れハ御不豫の内常に窮無

あらたなりかゝりし御家にも苦労小堀坂ぞ
人ハ卸く　大御所乃御為宜かりしとし
此例のなかゝらる縁く常憲院のことは諸中雑
まじきとし朝夕御脉を窺診し感領之色
若正して常憲をしらせ自ら侍く御病
かしく私らがを防ひしかども再度追別人
小御藥のことを命ぜられんとやまとして
ゆるされずて　将軍家西丸にいらせ給

時御前へハ召出され御病痾さわやかならせ給ふ
ましの御詫ありけり○同安部正甫は　大御所の
御病のやうと申そしは其の後御藥のこと辞し申
備しと命ぜられしは辭し申しに再度に及ひ
しかハ武田長春院　小御藥のことを命ぜらる是
なりと朝夕御脉を診して侍し安長春院か参りし
御藥を侯ひまつる時ハ再御藥を尊し給ふ下
さる○六月十六日より再御藥となる

若通書
内徑探賾 巻毛

大御所薨し給ひし時も傍の人々と相形く
御柩を待らるとありさる○ものゝ此年いく
老けれハ城中よく人々とも轄ふ来し何の
りこも使ひまちこ所らう出入をもうらとあるきさ
○寛延七年七月十二日奥医師となり友擧
例のとく給らる○宝暦七年十二月八日死
七十八歳芝金地院に葬

章貞　石寺淳蔵　実吉田施淳若正男

こ参来因安の郎小手仕をし此恵領岩正
あらうふ本城小召出されけるハ孫なれハ章貞
と養ひく子とし○後因安小姫とゝなる

安甫　実秋田前権守某男吉田松翁　若し助

宝暦元年十一月十一日初見養子○同二年三月
十八日御目見○同七年十二月廿七日家督○明和三
年七月十日死二十六歳　同所に葬

吉長　実ハ紀伊郡[illegible]井大和守従臣[illegible]文次男　吉田元卓　長次郎
高弐百俵

宝暦九年十二月十二日養子○明和二年七月
帰り家督○同六年○二月廿一日法眼医師○安永
七年八月廿八日後関の人へ治料下され○
同九月廿日西殊の素人の治料上ケる○安永十
年五月廿日御門跡ゟ山ニ時従ふ[illegible]
○天明五年十二月廿二日卒

子兄（チカタ）　元宜　長次郎
寛政七年十二月廿八日初見

丹波姓　本姓劉氏
吉田

従五位下典薬頭丹波朝臣康頼苗裔吉田盛
方院浄快二位法印十一代之孫吉田盛方院之門

同浄慶法印長男

浄珍　吉田盛方院民部卿法印
慶長年中京都ニ[illegible]

東照宮へ拝謁し亟奉仕て扈従して御従あ
り山城国にて手原を給ふ○元和六年
致仕○同七年六月十六日死二十九葬京紀
知恩寺中浄土院に葬

浄元

吉田盛方院玄同か法印

元和七年十月家督隔年江戸御番を承り府の
時帷子二を献御服り、金二枚を給○寛永
元年十月法眼○慶安年中
大猷院殿御不豫膈噎の時御薬を奉り御平愈
に依て侍醫を命ぜられ江戸に移る○兼廃元子
十二月廿八日法印○寛文九年三月十七日死六十
九葬芝金地院に葬

浄友

吉田盛方院浄元か法印

寛文九年家督○同十年十月法印○元禄

十二年四月十四日死六十四歳同所に葬る

浄仙　吉田盛方院支門ノ法印

元禄十一年三月奥醫師○同年十二月法眼
○同十二年六月家督○同年十二月法印○同
十五年六月廿二日改易

志清　吉田牧隆

正徳三年十二月十四日
文昭院殿一年乃周忌に依て浄仙か罪をゆる
さる然るに浄仙已に死しけれハ志清召出さる
○同四年二月九日月俸廿人口を給ひ寄合
○同年十二月廿八日拝謁○享保十四年九月廿
一日　天英院殿御附○元文三年七月廿
九日　蓮浄院殿茶事を奉る○同六年二
月廿八日　天英院殿逝去したまひて後

番合○同年六月晦日御番醫師○寛延元年七月廿六日　月光院殿御附○寶暦二年九月十九日　月光院殿逝去の後番合○同十一年十一月廿八日死八十歳同所に葬

眞菴　吉田快隆

寶暦三年七月十二日　蓮浄院殿の薬を上り○同十一年十二月廿九日家督○

同十二年二月十六日之労を賞せられ番合醫師○同年六月十日御番醫師支科一日儀○明和二年四月十日病免○同九年八月十七日死六十一歳同所に葬

玄厚　吉田快淳

明和九年十一月七日家督○安永六年八月十三日致仕○同七年七月十七日死[illegible]三十一歳

同寺ニ葬

幹
吉田快庵
（渓彩斎）安永六年十二月廿八日養子〇同六年八月
十三日家督〇天明二年二月廿八日叙法眼
師〇寛政三年十月朔日寄合ニ被召出
乃科之のおもむき後上

常憲院殿御筆忠信ノ二字浄恁拝領ス
今ハ高野

著述目録

家方二十八剤（秘説 不伝）　雲光院御代医官　吉田盛方院法印浄快著
鴻宝方（編失）　後花園院御代医官　吉田盛方院法印浄秀著
摂仙方（闕本）　東山義尚公侍医　吉田盛方院法印浄孝著
精撰方（闕本　日）　吉田盛方院法印浄承著
新撰方（闕本）　後柏原院御代医官　吉田盛方院法印浄運著

續添鴻寶秘要　全　同

増損附益抄　闕　吉田盛方院法印浄見

小雙紙　編失　正親町院安医　同　吉田盛方院法印浄忠

達源方　同　吉田盛方院法印浄勝

經驗奇効方　〃　吉田盛方院法印浄之

亨全方　同　吉田盛方院法印浄友

高弐拾扶持
家紋丸内二箱

藤原姓

吉田　先祖不詳

藥剤　吉田秀清

寛文十年九月廿一日稲田御殿へ召出され

同廿三日

清揚院殿へ[illegible]し

文照院殿御部屋之方へ附られ奥醫師〇同

十一年十月廿六日月俸を給ふ廿人扶持。天和三
年死去本所中之郷延命寺ニ葬

不知

吉田秀庵

天和三年十二月十五日藤田数馬家督。貞享二年十二月桜田
御殿醫師。同二年正月より表御番。
同月十日初見。元禄十四年四月十三日より
御目見合。宝永元年十二月廿五日

文昭院殿西丸へ入らせられし後同十七日若
年寄支配。享保五年五月十三日
天英院殿御附となる　竹姫君附女房
等の治療にあつかる。同年六月十
四日　蓮浄院殿御廣敷上る。同八月
十七日　法心院殿御廣敷上る。同月
廿七日　寿光院殿御廣敷上る。同年
十二月廿九日支料百俵。享保六年四月

廿六日　浄岸院殿診脈。同年七月廿日
天英院殿診脈。同年十二月十九日
月光院殿診脈。同七年十一月七日西丸宿
直を命ぜられ。同十年七月六日免さるる
。享保廿年十月十二日老て致仕し寄合
に列す。元文元年六月晦日死す七十一歳
同所に葬

常倹

吉田秀和　仁庵

享保八年二月九日初見え。同廿年十月
十二日家督。同日　天英院殿御附
支料父のごとく給ふ。元文元年六月
九日　浄岸院殿御廣補となる。同二年
七月晦日　蓮浄院殿御廣補となる。同
六年九月廿一日　法心院殿診脈及び
の廣補となる。同寛延元年七月十九日寄合医師

○延享四年三月十二日奥御用 同十五日御脈を診ふへき旨命ぜられ廿石並に料百俵賜はる○同月十八日御広敷番○宝暦元年十二月廿六日 蓮浄院殿診脈○同三年七月廿三日 浄岸院殿診脈○同十年五月十三日二丸勤○同十一年八月一統寄合○明和元年十一月十六日致仕○同二年九月十二日死 六十三歳 同所に葬る

常知 吉田秀庵 元東

延享元年九月十八日初見○宝暦十一年御広敷番○同十二年閏正月六日蓮浄院殿診脈及び同じ方の女房の療をうけたまはる○明和元年十一月十六日家督○同年閏十二月十一日寄合○明和二年二月十一日 法心院殿診脈 浄岸院殿診脈

○天明四年七月十二日死 六十三 同廿日葬

孝長

吉田三左衛門 二男 二十人扶持

天明四年十月六日家督

林 秀和

姓不知 高三百俵 家紋丸ニ桔梗 茶實

吉田

長崎外科吉田自休安齋養子

筑前太宰府天神別当西大寺居 信家来坂田太郎左衛門男

吉田自庵

昌全

養父吉田自休安齋肥前國長崎ニ住居

南蛮阿蘭陀大明の外科治を学ひ名

三國の治法を精選仕一流を相立三國流

と申立長崎ニ而於て外科仕居候処
昌全儀自休養子ニ罷成候方流
儀相伝自休名跡相続其後長崎唐人
屋舗役医相勤居候処貞享二寅年
長崎湊海商船ニ而北京順天府之
江新と申唐人罷越候而発背癰疽
相煩昌全療治仕候而全快右江新帰
国之時年右謝礼として扁額并音物
等相贈候儀相伝其後昌全

元禄四未年長崎より被召出廩米二
百俵を得ひ此例米を五〇同六酉年
十二月法眼被仰付百俵更外科
常憲院殿御筆を得候

敬謹
御台所御筆

亀鶴
御名判

〇北京江新より贈し額上覧ニ入る〇宝
永七寅年七月廿八日致仕〇正徳三巳年
四月十三日死す谷中正運寺葬る

昌建

筑前太宰府天神別当大鳥居信泰家来坂田舎人二男

吉田自庵　自碩

寳永六丑年四月十八日初見○同七寅年
七月廿八日家督寄合○享保二酉年
十二月廿七日御広敷御用○同三戌年
五月廿日浄円院殿御用相勤○同七寅
年正月廿八日父自碩長崎ニ於て除跡
願之通御助成として銀八貫目宛父
自庵相果候迄毎年被下○同十三申年
四月日光御社参供奉○元文五申年
八月十二日死去同寺ニ葬ル

昌豊

吉田自庵　自碩　壽之助

享保九辰年十二月十一日初見○元文五
申年七月十六日御広敷御用同月嫡子
五節句月並出仕をも命せらる○同年

十二月二日家督○寄合○寛保四子年
正月十日死去二十三歳同寺ニ葬ル

建明

吉田自碩　自元　園之助

延享元子年四月二日家督○同四卯
年正月二日初見○宝暦六子年十二月
四日法眼寄合医師○明和二酉年八月十日
病免○天明元丑年九月四日死去七十
三歳同寺ニ葬ル

建改

吉田自元　豊助

天明元丑年十二月二日家督○同六午ニ
年七月八日死去二十八歳同寺ニ葬ル

建儔

町医師
実梶原意庵恒則忰
吉田自仙　房太郎

高二百俵

天明五乙巳年四月七日聟養子〇同六午年
同十月六日家督〇寛政元酉年正月
二十六日御見習〇同十二申年二月廿八日隠居

昌言　自豫　小鉄

実目黒道琢尚忠二男
寛政九年九月廿一日聟養子〇同十二申年二月
廿八日家督

有徳院殿御代

吉田　源姓　本氏柴木　高二百石

家紋　三ッ地紙ノ内酸漿　四ッ目結

吉田浄理亮末孫山城久世村郷士
吉田吉郎左衛門男

梅庵法眼

郷直

於紀州召出〇長福君御匕〇享保
元年八月四日二丸へ御供〇同年九月

二百石○同年十一月廿四日法眼○同九年
二月廿五日死稲荷町善國寺葬る

郷英　梅庵法眼

実成田宗庵法眼男
享保九年四月二日若君様御番○同十三
年十二月廿六日若君様御用○同
十七年十二月廿六日表御番医師○元文
二年四月廿六日刑部卿殿附○同三年
十二月御匙刑部卿殿御施薬御用之時
有徳院殿御成御匙格之作法之趣
旨上意御沙汰候ニ付
有徳院殿より銀百枚被下三拝領○寛
保元年十二月十八日法眼○寶暦元年
七月廿日死同寺

郷晌（ミツ） 梅隠

実梅庵郷英二男

延享二年五月二男惣領○寶暦元年

十月六日家督○天明二年八月十七日

死同前

郷教 梅庵

天明三年十一月六日家督○寛政十年

九月廿八日表御醫師

常憲院殿御代

吉田　高二百俵

源姓　嘉武　佐々木　家紋　地紙之内破花菱之　角之四ツ目結

吉田杉庵宗仙嫡男

宗貞　了庵

元禄七年十一月九日新規召出され同八

年十一月廿五日廩米二百俵○宝永元年

十二月十二日法眼○致仕○享保五年十月

廿七日死八十三歳赤坂松泉寺葬る

宗三　元庵

家督寄合〇正徳六年二月七日死廿七
同寺

宗益　一庵

家督〇享保十四年十月廿日死同寺

宗治　一庵　六三郎

享保十四年十二月廿五日家督〇宝暦
十二年五月十六日奥医師〇安永四年
六月八日死五十九歳同寺

宗刕　貞順　然蔵 後ニ春山

安永四年九月六日家督

文化五戊辰年十二月廿七日隠居　同八未年四月二日

病死　同日葬

文昭院殿御代

吉田

源姓　高二百二十俵

家紋　九曜 裏梗

松平内膳正信定末流左馬忠頼

二男

忠勝

長七郎

紀伊右大納言殿ニ仕其後浪人

忠之　長八郎　右同断ニ相見え　栄元

浪人医師天和三年十二月十九日死　卒

三十三因慈眼寺葬る

忠寄　栄元

宝永五年十二月五日召出

宝永六年八月二日大五郎殿出不例

ニ付被召出御蔵米相渡出来為上

御合被下御切米二百俵差年寄並○

宝永七年七月朔日御加増五十俵○享保

四年十二月晦日死　卒　葬同寺

忠正　栄元

実浪人永井市郎兵衛某男

宝永七年十二月十九日被召出ニ付○正徳

元年七月廿五日御目見○享保五年
三月二日家督○元文五年七月朔死
六十歳同寺

忠説（トキ）　栄隆　栄元

元文五年九月四日家督○寛保二
年六月廿日家業出精ニ付寄合医師
○宝暦六年九月四日西丸奥医師○
同年十二月法眼○同十年五月十二日
御本丸○（同十二年十一月朔日若君様御附）明和六年十二月九日西丸勤○
同九年七月六日死六十歳同寺

忠直　栄元　元次郎　日記　栄徳

初メ○明和九年十月六日家督○寛
政三年十二月廿八日致仕　文化四卯年十月
七日病死同寺葬

忠實　栄次郎
栄全
寛政七年正月廿六日醫業出精ニ付
御褒美被下○同十一年十二月廿八日家督○
唯今ニ而御番衆之内[illegible]　享和元酉年
十二月十日病死同所ニ葬

○
源姓　高千石
家紋　抱茗荷
蔦
吉田
新羅三郎義光より出吉田太郎信
後裔吉田出雲守盛方長男
盛次　吉田七左衛門　隠居宗参
父出雲守盛行天正十八寅年六月廿三日
討死後浪人ニ而元和元卯年大坂
御陣の時

東照宮へ拝謁松平上総介忠輝に附させ
られ其後浪人となり武州鴻巣にありて
慶安己卯年八月十一日死して
盛次妻は山　松平出雲守家臣某女
男子壱人女子壱人出生盛次死後稲田
御殿へ奉仕小山と号す
常憲院殿御誕生の節御父君御附となり其後
御本丸へ御供移の時老年寄役を
命せられ遂廩米千俵を賜ひ老養
料として致仕願ひ奉りて元禄三年午年二月
三日致仕小石川に宅を賜はりし二百
七拾俵を小山隠居料に賜ふ小山米
千俵を小石川の宅を賜ひて後
小山九十歳年賀の節
常憲院殿福寿の二字并雛の御画御染筆
あそばされ表具仰付られ小山に賜はる
○元禄十二卯年二月二日死して九十六歳
○同月廿三日寺社奉行井上大和守宅に

於て浄念寺ニ位牌石塔迄寺領ニ被
小山寿性の内願並しめく三拾石賜り
獨禮格命せらる右小山殿浅草新堀
浄念寺ニ葬る家

靈昌　吉田小右衛門

慶安三寅年新規召出され
大猷院殿へ拝謁廩米二百俵賜ふ

常憲院殿附御小納戸○寛文八申年神田
御殿浄徳院殿附○延宝八申年浄徳院殿附
○西丸御小納戸○天和三亥年五月廿八日
逝去之砌御遺物として探幽筆
寿老人御掛物拝領○小普請入○貞
享三寅年十一月十九日御小性組○同元
辰年七月廿九日死ス同寺ニ葬ル
森五郎

盛[illegible]　改

吉田小左衛門　孫三郎　治右衛門

元禄元辰年十二月十日家督○同二午年
二月六日小山夜来手傳锡ゟ以て之
锡ゟり三百七拾俵ハ小山共に老の料
ゟ給ひ同月十五日御小性組○同年
八月十日桐之間御番○同月廿七日御徒頭
○同太申年四月十五日宇治御茶御用
同十一日今之夜時服二○同七戌年十二月
廿八日御廊下番頭○同八亥年十月
十八日死去　同寺小薬執
辛未年

盛封　初盛治

実ハ吉田盛昌二男
吉田小右衛門　文馬　今三郎

元禄八亥年十二月十二日家督寄合○
宝永四亥年八月十二日御進物番○同　布衣
六丑年正月十日豊後守ニ勤仕同年十二月
廿一日寄合○正徳四午年二月十五日退

傳次○同丁未年四月
東照宮百回御忌御法會ニ付日光山勤番○
享保五子年二月十二日宇治御茶御用
同年二月廿五日今ニ被附候二○同十三申
年日光御社参供奉○同十六亥年八
月廿八日御先手御鉄炮頭次○宝暦元寛延事
正月十一日御持弓頭次○宝暦十一巳年二月
二日死去同寺ニ葬ル

盛英

吉田小左衛門　主水　源左衛門

享保廿卯年九月十九日西丸御書院番（同年十一月本丸ニ）
番○宝暦十一巳年五月四日御鉄炮頭○安永
九子年十月廿三日老衰免願之通寄合ニ被○天
明六午年十二月十日死去七十六歳同寺ニ
葬ル

盛従　吉田小三郎
安永六酉年七月十日小性組○天明六
午年九月十二日死　葬[illegible]寺

盛謙　実松平内匠頭家来[illegible]三男　吉田小右衛門　一 喜十郎　二 [illegible]　三 [illegible]
安永九子年九月廿日孫聟養子○天明
六午年同十月同人嫡孫承祖○同年十二月
廿七日小普請○同七未年六月七日小性組
○寛政七年十二月[illegible]
同八辰年十二月十日　西丸付　文政元寅年十二月廿日
死　同所葬

一 正定

高弐百拾五石
家紋 丸ノ内酸漿
三巴
五三桐

源姓

吉田

佐々木太郎右衛門尉定綱五男巌秀後胤

正京

吉田孫右衛門

三河國吉田之郷士ニ川の比小や吉田川
大水漲之時
東照宮川を越させ給ふを從ひ正京を耕して

あらしとは深くありて川乃浅深能尋あり
正京淵踏して川の浅瀬を渡しまゐらす
公はみつから姓名を宣ひ依て当所乃八士
吉田孫右衛門正京とて之を知姓名
貴楠勇猛兼備して者揃の御諱字を正に佐久
従陣して節一万石出の事は後あり○慶
長六年六月廿日死

正次

吉田兵右衛門

東照宮三河国岡崎に御座まして此る出され
○永禄十年十二月遠州浜松城へ移らせ
られし時は供○天正七年
台徳院殿御誕生ありて御七夜乃御祝に盛勝
と号す○同十八年東照宮浮巣路と號す時
浮巣を乗馬百人を数ら尾張国鳴海と
供奉○同十九年関東に入らせ給ひし時

彼百人乃歩卒を預ケ可供奉よし命せら
○其後御刀を賜ハる○慶長七年四月五日
死武蔵国埼玉郡佐谷村清岩寺に葬

正蔵

吉田孫右衛門

天正十八年三河国ニて召出され○慶長
五年関ヶ原御陣ニ供奉し高名あり○同
九年武蔵国榛沢郡ニて百六十五石を賜ハ
御前にて米地乃御書出を賜ハ○寛永二年
十二月十一日関東ニて地卅二石の御書出あわせ
合て百九拾七石乃御判物を賜ハ○正蔵鷹
乃事ハ小要しくわしけれハ御鷹没○寛永
十年十二月三日御放鷹乃時正蔵小鳥をとれ
御鷹鶉を捉ければ時乃勝を賜ハ○同
十一年六月御上洛供奉黄金を賜ハる
○同十四年十一月十九日死同所に葬

賜りし所乃御刀御書出御判ある正茂子孫
御蔵米人吉田金次郎家に伝ふ

正茂二男 吉田兵助

始祖
正定

慶長十九年駿府にて新に
東照宮へ召出されて六拾石二人扶持を給ふ
○大坂両度之軍に供奉し御供○其後七人
一紙乃御書出を給ふ（御自筆）今大沢家に伝ふ○元和二年
八月武蔵国榛沢郡にして弐百石乃地を賜

給ふ○寛永二年十二月十一日同国乃地を
合て弐百拾五石之御判物を下されて今に
所持○正定御手鷹乃逃去りし時御鷹乃
手に依て御目筆物参乃如一振之後御
書返されしか八駿府乃後より北より之鷹に
被御書正定へ給ふ置されし候ふ今
に所持御書之写

慶長中入此所説

奥大膳二十三
継し条内文子へ
被仰候て許容
可遂目通へ候
申へし
家康（花押）
小栗忠政殿

○正定か聟榎本市内か子同市内幼して
死家絶し時正定次男あらハ榎本か家を絶
しむへからさるよし仰られ市内か家に伝へ
し采地百六十石乃台徳院殿御判物を給る然に
其時次男なし後次男あれともかの子人補故
これを譲らし此御判物今に所持す○寛永
十二年五月十六日死ス年七十二小石川長延寺に
葬

正三　吉田与助

寛永十二年家督。
大猷院殿御代より御手廻頭。萬治三年
六月廿四日死。四十二歳。同所に葬

正之　吉田与助　年録　三之助

萬治三年十二月廿二日家督。延宝之年
御手廻頭。天和元年三月廿一日小十人。
正徳元年六月廿九日同与頭。享保十二年
七月廿七日老免衰令御役上る。同十四年
九月三日死。七拾歳。同所に葬

利政　実ハ本村久次宗幸次男　吉田久助

元禄二年六月智養子。同六年十二月小
十人。同九年十二月不行跡ニ依て廩米

返シ年リ養子戻

推足
実者某七左衛門次男
吉田文九郎

元禄十四年七月舞養子○宝永六年正月
六日小十人○享保六年六月廿日十年出勤
小役ゝ評議ゝ褒金十五両ニ拝領○同十四年
十二月十一日御番○同十六年八月十一日死五十
三歳青山町蓮光寺ニ葬

正勝
実池田九右衛門政述四男
吉田与助
余次郎
文九郎

享保十五年正月舞養子○同十六年十一月
九日御番○同十九年五月十三日小十人○宝暦
四年正月八日病免○寛政元年正月廿日致仕
○同四年七月四日死同寺ニ葬

正園
和三遂
実吉田源五左衛門正数長子
吉田与平郎
市十郎
高五百十五石

寛永三年八月十九日嫡孫兼祖○寛文改之
同年同月廿一日祖父家督○同元年九月廿九日初而
○同七年三月廿四日中里乗馬上覧

○

高三百拾三石七斗
家紋 藤泉
左二ツ巴

源姓

吉田

吉田彦助家政惣領

吉田清左衛門 清三郎

政勝

東照宮へ召出され初十石下され御小普請
○寛永二年十二月十一日百六拾六石七斗加
御蔵米下され都合二百六十六石七斗ニ成
○同九年九月廿日死牛込宝泉寺ニ葬

政廣　吉田清六郎

大猷院殿御代家督。御手鷹匠。寛文八年十二月致仕。同九年巳月廿七日死同寺ニ葬

政方　吉田清右衛門　遁世　不忠

御手鷹匠。承應元年遁世。正徳五年十月死同寺ニ葬

政时　実政方嫡　吉田新之丞

嫡孫承祖。寛文八年十二月祖父の家督継。手鷹匠。天和二年三月小十人。元禄十年九月新御番。正徳三年八月十六日死同寺ニ葬

政重　実横地半助之賢二男　吉田次郎三郎

寶永六年十一月養子。正徳二年十月

廿九日家督○享保九年十月九日小十人○
享保十八年八月十六日西丸新番○元文
二年閏十一月廿二日御本丸新番○明和元年
同十二月病免○安永元年十二月廿日死七
十九歳 同所に葬

政盛
次男也 吉田冨三郎
高五百六十六石七斗
姓 渡邊
寶暦九年十二月無次男趣依○安永元年之十
二月廿八日家督○寛政八年十二月廿八
享和二戌年八月晦日御留守居番 文化九申年閏月四日
病免小普請 同十二亥年六月四日致仕 文政
之三年十月十七日病死同所葬

高百五拾俵
家紋 三地紙ニ丸ノ内
四ツ目結

源姓

吉田

従来源之秀義後胤吉田次郎左衛門尉光秀光秀より六代吉田機庵法
慶長年間京師ニ来ル足利
義満公の侍医より従来者

橋宗活三男策庵宗以次男

時令

吉田又八郎

元禄十六年九月六日新ニ召出而御勤定

其ノ病

○同月十六日初見○同年十二月廿二日廩米を給ふ 百五十俵 ○正徳三年七月廿一日病免之○享保七年八月廿日死青坂松泉寺に葬 二十二歳

時克

実吉田角竹宗知四男
吉田武七郎

宝永年月不詳生
享保七年十二月廿日家督○同十年十二月晦日死 二十歳 同寺に葬

時容

吉田勝次郎 巳之助 又八郎

享保十一年二月二日家督○寛保元年十一月九日 利祐郷及小十人○同二年六月廿六日同所小姓○皆勤乃賞時服を給ふ○延享三年十二月小十人頭及御近習番頭取○寛延四年九月廿日病免之○天明八年七月廿六日致仕○寛政二年正月廿一日死七十二歳

同寺に葬

時興

実ハ吉田玄庵宗理次男
吉田又八郎　高百五十俵
宗作
源理印

安永七年家督
天明八申七月廿六日惣領○寛政四年十月
廿五日御目見○同八年四月廿八日小普請入○同九年
十二月十三日評定所留役助

高弐百俵
家紋　丸内三目結
瀧

源姓

吉田

宇多天皇第九之皇子敦実親王より出佐々木
源氏秀義後流吉田下野守重政ニ代近江国
住人吉田助左衛門射道春養子

重氏

実ハ葛巻某男
吉田源八郎

大坂御陣之時重氏ハ射藝ニ不要也

東照宮関ヶ原射法を得て直きの傍に参り
別御陣小供奉。御軍の時大矢を以て
大坂城の辰巳の櫓を焼落して其他軍功
多く依て射手の司を命ぜらる。大坂
落城ゝ後西国のたゞを預かりとりける
されて弓馬乃道に勝れされハ召仕る
直きに大久保彦左衛門に傳を当分禄の料
二百石を給。寛永十六年三月依て伏見て

死

重春
吉田久馬助

寛永四年十二月十六日召出され御弓役。
同十八年十二月廿二日采邑をたまわりける
直きに酒井雅楽頭に傳を給ふ。同廿年
四月廿二日浅草三十三間堂造営成就に
依て射初のことを奉りぬ。同年七月

新に本城御留守役支配三百俵を給はり与
力十人同心五十人をあつけらる
大猷院殿まで氏が戦功を御尋ありし時
家の宗族の分及び本領の数とを書記
して奉り重ねて松平伊豆守によりて傳
へしに依て逐一に書記してたてまつる〇寛文二年
六月十六日死谷中玉林寺に葬

宗重（十上）　吉田久馬助
寛永十四年九月廿二日初見〇正保四年
十二月召出されて大御番〇寛文三年八月
十日御番を辞〇同七年正月十一日死同所
に葬る

某　吉田孫之丞
父が願ひによりて御先手与力へ召出さる
〇後死

貞連　吉田久之助

明暦三年十二月廿二日初見○寛文二年十一月十九日召出され大御番○貞享元年六月十二日元方御納戸○元禄七年九月十二日死同寺ニ葬

重次　吉田内蔵助

元禄六年十二月九日大御番○同七年正月廿九日廩米上る○元禄十巳年二月十五日桐之間御番○同年五月廿六日御近習番○同年八月七日大御番○元文元年十二月廿一日病免○同巳年五月三日隠居○宝暦六年八月十九日死八十五歳同寺ニ葬

重和　吉田靱負　初小源次

元文に年六月二日家督○同年十二月九日
大御番○寛保三年六月十九日西丸御納戸
○延享元年九月廿一日病免○同六年六月
十日大御番○宝暦十二年七月廿六日大
坂在番して死六十三葬大坂小橋東寺町
[illegible]巌寺に葬

辛識

実ハ跡部三郎右衛門某の三男
吉田十郎右衛門某の養子となる
三百五十俵

始 富次郎

辛

吉田和三郎

宝暦十年十二月三日番養子○同十一年
九月朔日初見○同十二年十一月廿五日家
督○明和元年十二月晦日父祖よりの履歴
及ひ代々家に伝ふる所の射芸をもって之
を色々[illegible]命ありて家の[illegible]として書記
しまする○同九年正月十八日大御番○
○寛政十一年十一月十三日老免○隠居○同十二年十二月卒年七十三葬[illegible]

寛政二年十二月十九日初見之○同三年十
二月二日[illegible]
大御番

寛政二年十二月十五日初見之○同三年十二月二日附
[illegible]大御番○寛政九年
二月廿七日死三十三歳[illegible]

重勝
直五郎
寛政九年八月四日家督

高三百石[illegible]
家紋[illegible]内膳[illegible]
[illegible]字

○
源姓
吉田

家澄
吉田立水
東照宮に召出され後尾張大納言殿へ附
られ尾張にて五百石を給

種久
吉田太右衛門

東照宮へ召出され御膳所役料米七拾石六人扶持
○後文昭院へ采地を加へられて附属し四十五石
の加秩あり七十石を合せて近侍とし七十石に同六石
とかへられる○二年後
台徳院殿へ附せられ深溝にて黄金を給ふ
○後加秩二拾石○寛文三年十一月十七日死

種次　吉田太右衛門

巌有院殿御代父の家督御膳所役○其後老
衰に依て貞享元年十二月十八日致仕○元禄
元年十二月廿七日死

種明　吉田新右衛門

貞享元年十二月家督番士八○元禄八年十二
月御仏前御納戸○宝永七年二月八日死
四谷連乗院に葬

種行　吉田六之丞

寳永四年二月廿六日来文ヘ家継ニ相成
享保十巳年死　同寺ニ葬

種益　実種行男
吉田新太夫（重一）　三郎

寳永四年正月廿二日相父家督○享保
九年八月十三日甲府勤番同九月廿八日
依願ニ相成り浮浪○同廿年正月廿日死
三十八歳

甲府大泉寺ニ葬

種賛　吉田新太夫（重一）　加賀　智松

享保二十年閏三月二日家督如父甲府勤番
○寛保二年五月廿三日上初見之○寳暦九年十二月十六日
十年来之勤労賞之旨十両被下之○同十一
年三月十六日御破損奉行被仰付十人扶持と
被下之○明和九年三月病死○安永二年

八月致仕○同三年十二月廿七日死 四十九 法名日寄

葬

種穰 実種益二男 吉田三十郎

高三百廿三石三斗六人扶持

安永二年八月廿二日家督甲府勤番○同七

年五月十五日初見○寛政二年七月廿三日御書

於甲府勤番同年九月廿一日甲府より同

廿三日於御城為之同御城入

吉富 淳雅 高百俵五人扶持

家紋 丸ノ内ニ違ヒ鷹ノ羽 角ニ四ツ目結 巴ニ小文字

近江佐々木住後武蔵川越ニ移御仕吉富

傳應 某長男

良徹

長圓

寛永十三年浪人ヨリ新規召出　五歳ノ時斗
坊主ニ而拾俵弐人扶持　○　延宝元年十二月
三日死　年齢不知　葬浅草大松寺

宣元

永立

一始
永徳

後年二改

実ハ[illegible]某二男 保
正徳三年養子　○　享安三年中屋闕坊

拾俵弐人扶持　○　養父長宗実子出生
享
永三戌年　丁子ノ中奉公成　十月相実方
苗字石井ト改　別家ニ成　角国内表坊主組入
格
石井永菴家之

高百俵五人扶持
家紋丸ノ内十文字 違雁金 角四ツ目結 巴ノ小文字

源姓

吉田

法眼斗坊吉田長常某養子

実ハ石井永玄二男
吉田仁右衛門
若之助
長常

包伯

寛文十二年十二月廿五日養子
延寶元年三月廿八日家督○同九年三月
十六日法眼宗坊ニ○元禄二年二月十八日御近
習之間方月俸二人扶持を加へ給ふ前の禄と合て廿俵

同人技術○同年二月廿九日御小納戸より召出
され月俸二人を加へらる○同十六年七月十二日
足俸百俵を加へ技術を給ひ御行水方○宝
永元年正月廿一日御次番宿直の料三百俵
を給ふ○宝永六年二月廿二日免され小普請○寛保二
年七月十八日致仕○同年八月廿二日死七十二
歳浅草本松寺に葬

包保

吉田権之助

享保元年十二月廿六日次男惣領○寛保二
年七月十八日家督○宝暦三年正月七日
死四十九歳同寺に葬

智見

吉田勘次郎

岩之丞

宝暦三年四月三日家督○同年十月廿六日初見
明和六年正月廿六日
御勘定○明和八年八月廿日病免○天明八年

七月廿六日致仕

端斎

吉田久之助 松次郎 益之助

高百俵五人扶持

天明八年七月廿六日家督。寛政三年十月廿二

大納言様御近習。同四年五月廿三日御目見。同五年十二月

十九日小普請入世話取扱

○ 藤原姓

高百五拾俵 家紋 蔦 向梅 柏

吉田

伊豫守藤成之子也。吉田左兵衛正時後胤

若狭国住人吉田主税正明嫡孫兼祖

正勝

吉田孫三郎

寛永二年二月九日西丸土圭之間詰書廉

米百五十俵。正徳三年二月廿六日隠居

○同年七月廿九日死浅草松誉頓誉寺中
本性院ニ葬

正清
実ハ伊勢国ノ士水平左衛門某次男
吉田左源次

養子
正徳三年十二月廿六日家督父の跡を〻〻西
丸土圭之間坊主○同年六月十八日一統小
普請入○享保十一年正月十一日死同寺ニ
葬

正次
吉田孫三郎

享保十一年正月九日家督○同十九年
六月朔日表御右筆○同年七月六日奥
御右筆○寛保三年九月十二日死同寺ニ葬

正易
実ハ仁左衛門正秀次男
吉田豊次郎

寛保三年十二月二日養子家督○寛延二年

八月廿日病ニて死廿三歳同所ニ葬

正陳　吉田少八郎

寛延二年十一月四日家督○明和六年十一月十六日西丸小十人○安永八年正月十六日御本丸勤○同年十二月廿八日病免○寛政六年八月九日致仕

正恭　吉田鉄之助
高百五十俵

寛政六年八月九日家督

高千石
家紋　丸ノ内藤紋　下リ藤丸

藤原姓

吉田

時勝　吉田小兵衛

織田信長ニ仕ヘ又太閤秀吉ニ仕○元和元年東照宮ヘ召出サレ現米七十石ヲ給○寛永十二年十二月三日死

正時　吉田四郎兵衛

台徳院殿御代奉仕。明暦二年二月晦日死
小日向生西寺ニ葬

正蔵　吉田権兵衛

御手鷹匠。寛文九年三月致仕。同十年
四月十二日死同寺ニ葬

正道　吉田八右衛門

寛文九年三月家督。同年閏十月三日
厳有院殿ニ謁シ御手鷹匠。宝永六年
七月致仕。正徳三年三月三日死同寺ニ葬

正止　吉田百八郎

宝永六年七月廿三日家督。正徳三年

六月十八日小十人○同巳年正月廿二日病免
○享保巳年九月十九日致仕○同六年八月
十三日死同寺ニ葬

正武　実正武之二男　吉田次郎助

兄之養子○享保巳年九月十九日家督○
同七年十月廿二日小十人○同九年十一月
西丸小十人○同十九年六月十一日死五十一歳

同寺ニ葬

政友　吉田彦右衛門　政之助

享保十九年九月二日家督○元文巳年
十一月十一日小十人○延享二年九月十二日
有徳院殿御附○寛延巳年七月十二日御附
一統小普請○宝暦二年十月十三日小十
人○同九年十二月十五日十年来奉仕不怠

ニ依テ評儀之褒金五両○明和九年七月
十七日死五十五歳同寺ニ葬

政大

吉田半左衛門　諱龍
高現米七十石

明和九年十月六日家督○安永六年十二
月十日西丸小十人○同七年十月十三日山里
御庭大的　上覧時服二上給○同八年
四月十六日御本丸勤○天明元年五月
廿六日西丸勤○同二年十月四日吹上御庭
大的　上覧時服二上給○同六年閏十
月廿日御本丸勤○同七年八月三日病死
文化五戊辰年七月廿六日被仕　同九壬申年二月廿一日病死
四十七同寺ニ葬

有徳院殿御代

吉田　高四百俵

源姓　家紋　直四目結

吉田重左衛門尉秀辰五代安藝国住人

佐々木四郎左衛門秀清嫡子

佐々木文次郎　吉田四郎三郎

秀長

初長秀

延享二年十二月廿四日御徒ゟ右抱入之

同四年十二月廿九日暦補御用手伝測量

所々出勤宝暦二年八月廿日御免○同年
十二月廿九日ゟ手伝方役○同三年十二
月廿二日為測量八幡宮江被遣御用出勤
○褒美銀十枚○同七年七月依病御免
○明和元年十二月十九日ゟ再出役ニ付天文方
新規廩米二百俵○同年十二月朔日ゟ御目
見○同二年二月廿二日暦方補御用ニ付
上京御暇時服二銀十枚同年五月十
五日御暇同日出立

有徳院殿御代被相糺候ハ貞享暦法甚疎
略ニ而術ニ未タ委ク無之候ニ付右暦法補緝
可仕旨西川忠次郎江被仰付候処忠次郎儀
其術理ヲ不得候而土御門家江引合新
暦製作有之十二ヶ年以来成就ニ付被差上
宝年改暦被仰付世ニ被相行候得共是又
去ル未年九月日食相違致諸人見ル
通ニ付強ク附候
有徳院殿被仰出暦補ひ候儀今以不被

成就難有候ニ付今般其方ニ新暦調之
御用被仰付候向後暦之儀貞享暦之趣之
通相心得日月食之儀も精密ニ相知候様
暦面ニ記可申旨被仰出候也光照之者
大係故〻新暦調御用不出来違之候明
和六年暦法改正成就ニ付文次郎製作
之術書暦法正宗暦甲戌元暦法合都十
巻同解義二巻同暦法新書續録二
巻同年十二月廿六日差上翌年四月廿二日

寛政之度○安永八年十二月廿六日出書
物奉行○同九年六月廿七日右同之度○天
明六年七月十二日免被仰付○同七年
九月十六日死八十五歳葬麻布光林寺之
葬之る

秀升 秀房 靱負 吉十郎

明和二年十二月廿八日新暦調御用○同

三年二月より新暦調御用除免○同年
七月十八日初見之○同四年閏九月廿日天
文方見習○同七年四月廿六日褒美金二枚
○同八年六月朔日より技術七人ニ技術○安永
八年十二月廿六日より天文方二十人ニ技術修りう
父付のごとく測量御用御手伝七人ニ技術
○同十年正月晦日より深川作用○天明二年
五月廿八日牛込測量ニ付近郷より来り度々
御用差支ニ付浅草[illegible]斤付[illegible]ニ付

同七年十二月同より家督○同八年七月
廿一日深川佃沖ニ而測量ニ付為見旅合ニ近
貴利ニ付褒美銀二枚○寛政元年三月
廿日阿蘭陀永續暦御見之御付ニ付右和
解差急候并阿蘭陀暦永久ニ而相用候を
御試且日本ニ而も右永續暦出来ニ候ニ
候ハゝ御手当可有之ニ付右永續暦并和解出来ニ付
去ル下旬三月七條義通辞共ニ而右和解致
正仕并阿蘭陀暦永久ニ而和利用候を御試

及永續暦ニ天度ニ合ヒ不申旨書付差
上且日本ニ永續暦並頒暦ニ合ヒ候様相
考暦日永年捷見ニ可仕旨七月同所差上
候処同八月十七日褒美銀七枚○同二年五月
廿七日此度天論筆約ニ天文方ニ而被仰
近ニ而○同八年九月十日改暦御用ニ付
上京被仰付候ニ付銀十枚○同九年十二月
廿七日褒美金五枚

秀賢　勇太郎
寛政二年二月廿一日初見○同九年十二
月廿七日父ニ差添上京御用相勤ニ付銀十
枚○同十一年十二月廿二日天文方見習○

秀民　桒六郎

寛政九年巳四月廿四日改暦ニ付測量御用
手傳多人扶持被仰付同月廿二日父ト共ニ上京
同月廿六年中手當金弐拾両同年九月別ニ
御手當金壱両被下同年十二月廿一日褒美金千
疋同月晦日測量御用手傳

吉田　高現米八十石五人扶持
源姓　家紋　三ツ目結　丸ノ内竪三本爪
佐々木源氏秀義末流久馬之助重
春男
孫兵衛

某
御先手ニ而高現米八十石五人扶持

某　孫太郎
御先手与力ニテ死

重勝　安左衛門
寛文四年御先手与力ニ元禄三年七月廿二日死九品仏本妙寺葬る

季重（ヨシ）　八太郎　致仕　松吟
御先手与力ニ致仕ニ寛延巳年六月廿八日死七十八歳同寺

佳國　久太郎
実浪人増田大膳正直男

巻筆
享保十五年七月十二日御免之分〇元文
元年十二月廿二日御代官役〇寛保二年
九月関東筋出水ニ付下総古隆村之吏
食貸御用〇同三年信州水損不見分
御用〇寛延元年朝鮮人来朝ニ付駿州
江尻宿御賄御用附役二〇宝暦二年
濃州尾張川々見分御用〇同年十二月
右川々御普請御用同四年正月御藤國之
五年七月金三枚附役二〇同六年備前

備中境目之分御用御勝手同年中呂猪太
一 来ル元御代官所下[illegible]御取
〇同年九月下利根川新利根川其外国
羽子野堰并久用水路御普請御用翌年
御褒美金二枚附役二羽打〇明和元年
朝鮮人来朝ニ付江戸御賄御用附役二〇
同二年日光御法会ニ付上家元御賄御用
金一枚附役二羽織〇不知年月同役之跡ニ付若杉
〇明和三年十二月御勘定吟味役〇

同四年十二月廿日死七十四牛込宗参
寺葬る

正質　右同

元文二年六月廿八日初見〇寛保二年
出羽守叙〇寛延元年七月甲府門〻浄
用座敷人今二夜時役二〇同〇年七月（
有徳院殿御霊塔浄御普請

常憲院殿御霊屋修復御用宝暦二
年十二月褒美銀七枚〇同六年八月
御霊屋牛込御普請御用褒美銀七枚〇同七年
四月八日拝借金年賦〇明和二年五月
十六日病免〇同年十一月五日死四十六歳
同寺

重徳　舎人

明和二年十二月五日嫡孫兼祖○同五年三月五日家督○安永五年十二月廿二日初見○同七年九月十七日圏的支配二度○同八年八月二日馬門渡令二枚○天明二年七月廿四日御書院番○同五年十月二日第康支配

享和二壬戌年九月廿四日病死
葬○○○○一法名○之性

敬徳　安吉郎

寛政七年十二月十六日於聖堂素讀吟味蒙褒美更紗一反

櫻田御殿

吉田　高百五拾俵

源姓　家紋　丸ノ内一ツ山
丸ノ内九枚笹

吉田権之助藤原義盛ノ当

七郎兵衛

伴者

元禄八亥年十一月新規召出　桜田御殿

添御勘定之内　切米五拾俵三人扶持○同

十年五月廿八日より勤定加役火付盗賊二之人
持場之上ヶ加合百俵となる○同十二年七月
廿一日御本丸御用番申渡國之位條之役
仕候之御用○同十四年九月御役御免寄合
座候旗本○宝永元年十二月十八日一
同七年免勤○正徳元年十二月廿二日加役
火付盗賊合百石加増成○享保六年
六月廿日

有徳院殿御代御目見当勤之為内證役人金
武役○同二十年閏三月十三日病気ニ依テ退役
指控○元文四年十一月四日死七十七歳　法名
麻布白金瑞聖寺葬

春達
源之助
宝暦　桜井若狭守政秀次男

年月日不知養子○享保十八年十二月十一日
浪部屋住ニテ勤之○元文四年九月廿日
家督○寛保二年二月大和國代官
御用○寛延二年八月十二日御代官安房
上総常陸國之内石高支配○同年十二月晦
日同代官所ニ而支配
宝暦二年安房上総之内石場地
○同三年閏二月廿日上総下総國新田
場所見分并飯沼落堀浚目論見御用
○宝暦十年甲斐國ト場所巡検之方石高支
配同國石和陣屋ニ而支配○同十三年朝
鮮人来聘ニ付三河吉田渡船場御普請
御用○同年十月十八日死 甲斐國志摩寺
葬 年三十

春良
安之助

明和二年閏十二月廿七日養子家督○安永三
年十一月十八日西丸小十人組○同七年十月廿
六日於西丸山里御庭
孝恭院殿大納言御覧之時御褒美○同八年正
月十八日本丸勤○天明元年五月廿
六日西丸勤○同二年四月十八日
大納言殿附○同六年閏十月廿日本丸
勤○寛政七年二月五日小普請入清水御廟稽
鍛子○同八年十二月十日西丸勤

櫻田御殿

吉田

源姓　高弐百五拾俵

右御役　抱茗荷　丸三ノ桐

新羅三郎義光ヨリ出吉田右三郎
有信後胤吉田出雲守盛行嫡男

七左衛門　宗云

盛源

父盛行小普請組ニ住　天明十八年十二月廿五日

篠出海合戦之節討死仕盛次浪人
而有之元和元年大坂陣之御
東照宮江被召出 仁科松平上総介
忠輝ニ被召抱上総浪人仕ニ付清風
政次方寓居寛文拾年八月十一日死
浅草新堀浄念寺葬

盛信

故有而代佐々木と名宗ト云
佐々木伝蔵
初三左衛門
徽宗

延宝五年正月江戸神田ニ而被致於御書
院番被召出切米弐百俵○同八年十二月西丸
御小姓組○天和二年九月西丸御小納戸
入○元禄九年八月廿一日被仕○正徳五
年二月廿六日死同寺葬

盛直

伝蔵

元禄九年八月廿一日大番与力新右衛門妻

与三郎事右吉田小路○正徳二年九月
二日死同寺葬

盛苗　七之丞

正徳二年十二月廿七日家督○享保十二年
十二月十八日大番入○同十六年九月十八日
新番入○延享元年九月廿日病免○
宝暦元年六月廿九日死同寺葬

盛有　長三郎

宝暦元年九月二日家督○同七年九月
廿二日大番入○同十二年十月十二日病免
妻ル之而死二十八歳京都錦小路大文
西ニ入所休務寺ニ葬

盛庸　捨五郎

實ハ盛苗二男

宝暦十二年十二月廿七日為養子家督〇

明和九年正月十七日死二十年　浅草新堀

浄念寺ニ葬

苗孫

實ハ盛苗三男

三孫

明和九年正月廿七日家相續〇安永二

年二月十三日死二十七歳　法門寺ニ葬

傳範

初称文次郎

正長

始正房

實ハ三宅十二郎長清二男

安永二年正月廿八日為養子家督〇同六

年六月廿八日元方御納戸〇同九年十二月

十四日御納戸組頭　出精相勤候處

御小姓組番頭○天明七年十二月十二日座補
清閑寺旧勤の節慶姓組番頭○寛政四年
六月晦日大番頭御免○ 享和二壬戌年正月廿七日
病死 歳五十四 同寺葬 法名
春茶

盛房 後盛長 伝次郎
寛政十二年九月廿五日初見

政ノ々

東照宮御代
吉田
源姓 元祖ハ不知 家紋ハ丸ノ内梅鉢 又二ツ桐

先祖不審吉田源右衛門尉ハ正景長男

家別ニ有

吉則 与右衛門
父ハ正景二男 吉田ト 改ム

所台岡ノ溢水之列
東照之右衛門總テ又之人正景耕作之
土ニ至リ右衛門正景ハ代々清涼寺
ニ葬ル正景ハ徹傳ヲ以テ上侍ニ如ク台岡ノ于時
以蔵織ヲ以テ姓名ヲ御尋有之霜面之全
台岡源右衛門正家ト申上候 以後
ニ御褒美トシテ姓名貴病霜猛家傳之者
ト申上ルニ於テ子孫ニ至ル迄帰陳之
御下知 右出有稀人 上意有之ニ付

東照宮思召ニ被遊御座御忠孝之段
上意ヲ蒙リ屋敷被下置 右者御出生屋敷之珍様
十年十二月遠州濱松之御城ニ而御移徙
之御事御座候ニ付天正七年
台徳院様御誕生之節御産湯拝
従蔵仕候十年御誕生之節被仰付
其後百人ノ頭ニ被仰付尾張海之御供
十九年関東御入國之節御供百人之頭
之頭召連之御供被仰付 御用之節

西丸ニ而戴仕候 慶長七年正月十五日死 武蔵
荏原郡 桐ケ谷村清岩寺葬

政永

養祖 初彦三郎 辰之助 虎之助

右同重徳嫡別二男

慶長八年
東照宮 駿河ニ而 被召出 御鷹匠 被
仰付 ニ後御蔵米人養蔵米百石

大坂ニ而 陣之節 百俵ニ人扶持 御加増
大坂御陣 東照宮 御供仕 御帳之節 煩 被差
右之旨 相續 被下
台徳院殿
大猷院殿 御代 御奉公仕候 寛文九年
三月廿六日死 八十三歳 牛込横寺町 圓福
寺葬

政成 加四郎

寛永十二年十二月初見○後[illegible]
役○天和二年二月廿一日番入○元禄
七年六月晦日死同寺葬

政永 母某 初八郎兵衛

實ハ岩下左右衛門某勝次男
年月日不知為養子○元禄七年七月
十日家督○同十二年六月廿八日小十人組
○享保九年十二月十五日
大御番ニ移○同十一年正月十五日老免寄合
金賜之○同十九年十二月十二日死八十一歳
同寺葬

政重 母某 初市右衛門 後[illegible]

實ハ岩下左五郎某倫次男
年月日不知為養子○宝永六年閏正月十八日家督

頭組小十人組○享保二十年二月隠居家
督○元文二年七月廿日小十人組与頭○
宝暦五年七月十七日老免寄合被扣○
同八年二月十八日死七十二歳同寺葬

義昌　左近　又蔵

実政寛惣領八郎右衛門政舎長男

宝暦二年七月廿七日嫡孫承祖○同八年
五月廿八日家督○同十年正月廿二日西丸
小十人組○同十一年八月二日御本丸勤○同十
二年十二月十五日西丸勤○同十三年十二月
廿八日病免○安永七年正月十八日隠居
○同年七月隠居名利發又蔵と改名

享和元酉年六月廿一日病死寿七十三同寺葬法名覚蔵

政徳　三右衛門　初文三郎　権之丞

実者佐野友之丞政利二男

天明四年十二月廿五日聟養子○寛政七

年八月十八日家督○同九年十一月廿五日初
見○同十年八月六日西丸出仕

台徳院殿御代

吉田

卜新娃

三百五拾俵

家紋 丸之内桔梗 丸之内

京都浪人吉田長右衛門従連長男

信好

長右衛門

宝永七年十二月十八日表重間番 召出
切米百五拾俵○正徳三年五月十八日[illegible]

小普請入〇同年十二月廿九日於役江〇年
月日不知
台徳院殿御抱之旗本子
嚴有院殿御家人而后致遊之清繪御用
今以高倚住之〇享保七年九月六日死預
込鶴声庵 福相寺葬

信俊　藤右衛門

正徳二年十二月廿九日為養嗣〇享保二年
六月四日死同寺葬

信脩　長五郎

享保二年十二月二日為嗣〇同二十年十二
月十五日表御右筆〇安永七年五月廿六日
免御役金弐枚〇天明元年九月廿六日死
七十七歳同寺葬
又

信庸　弥十五郎

宝暦十二年九月廿八日継部屋住表右筆

○明和三年九月五日死年十一葬同寺

信副　源蔵

実者権右小平次恭春二男

明和六年十二月廿八日為養子○同八年十一月廿六日初見○安永六年十二月十九日継部屋住表右筆○天明元年九月廿二日養父死同日家督○寛政五年閏月廿七日小十人組○同七年十二月晦火之番[illegible]康精嫡子

信彦　八十五郎

実者[illegible]藤兵七五郎正辭次男

寛政九年巳月九日此上座間的支也

台徳院殿御代

吉田 以下條 古屋

源姓 二ヶ所 百俵 外 扶持
家紋 丸ニ菱 九ツ目 二ツ引

新羅三郎義光ヨリ出、信光ヨリ下条ト称ス
之織之下條伊豆守信氏二男

右衛門尉 初 源七郎 小左衛門

信直

天正十年武田信長生害之後甲府ニ在

方之者共依居甲府之城ニ押寄門尾
堅固ニ守る故攻亡皆々城之威ニ処甲
府ニ出ん方之案甲州若干纏集小
條氏直長尾景勝ニ注進之族有
之候處る筆
東照公奉存寄ニ中ニ信玄公之味
方仕對小條氏直遂防戦ニ及ヒ為居
軍事行為取菱縄而平岩七之助甲府
被遣致処出ん方之内大宝存秀所

城留守居人小條陸奥守ト一味ニ仕
氏直之内通仕候ニ付其節御軍事行為荒ニ為
古屋小荒清関全平居人ニ候　御存寄於
留守之上御成敗被仰付小荒清留守
討死致候ニ付其後御軍事行ハ之式
級就違　上ハ小荒清之宛行被為
在候処由緒小郎ニ被仰付就ニ而　御同月仕
其子別小荒清ニ為ニ處居人ニ申付之御息子
以
御小自為帯刀於今至前之一門来甲府

御出馬之尉様従之御条下吉判頂戴
為御加増百貫文於米沢下御判紙下全中帰申
候所致御前子　其背十二月此紙濃費給候今流
雲散水小状仕無地念候子
所之致長久之事
東照宮召出之御判戴之判形并御
万石代傳之兵正首尾之達上下申
東照宮又氏郷公亡尉之後名為　成出来
御入国之刻推井ノ内百五十貫文之所於米沢下
御所　但慶長十七年正月　死去年月並不知
大坂冬陣焼失

信忠

氏郷臣　初源七郎

台徳院殿御代氏郷臣之後名為　成臣
後山形付見御代召出之行付知行
為罷料会津蒲生秀行様ニ再代
所成門下被当忠郷公後東小微之天
海僧正而ニ下而御家人ニ取蒲生家相続之後甲
斐之鎮抜死去年月日是非不知

忠

忠雄　吉田佐五右衛門

忠雄実ハ當家菊亭相阪浪人ニ而甲州ニ
テ相果候故

大猷院殿御代百石被下置○後房浦源妻

百俵ニ加増○貞享元年五月病死

壱岐守殿ニ○元禄二年正月死候ニ付

東長寺葬

勝忠　七九郎　初中左衛門

貞享元年家督○同三年十月廿九日

御大番入○二之後御辞免○宝永六年

同月死同寺葬

秀平　権九郎

宝永六年六月家督○享保六年八月

十二日父家督○同十二年三月晦日辞免○
元文元年七月死同寺葬

友秀　辰八
元文元年十月二日家督○寛保元年十二月九日利政公御次小姓○同二年十六日辞免○寛延二年二月六日死同寺葬

信友　源七郎
寛延二年五月六日家督○天明元年十二月廿六日死享年二十歳同寺葬

信清　儀又郎　致仕　隠居
実者永田忠右衛門政行次男

天明二年二月八日為養子家督○同年
十二月十日西丸小十人組○同六年十月廿日御（至）
本丸勤○寛政元年三月十七日小十人組
附役二○二度同役○揃御上覧[illegible]西二
○九西半的[illegible]西三○同七卯年三月廿日
[illegible]京小[illegible]勝手○享和二戌年二月廿九日西丸[illegible]○
文政五子年六月八日西丸[illegible]
廿七日老衰ニ付[illegible]○天保四巳年二月
被仰付剃髪○天保十二丑年二月廿七日病死同[illegible]

台徳院殿御代

本国 [illegible]
　高三百俵
生国 [illegible]
　家紋 [illegible]
　大七ノ桐

新番[illegible]　[illegible]

直正

十[illegible]

野州河内村ニ浪人ニ而元ハ江
戸ニ而北条安房守氏長門人小泉
軍法極切伝ハ有之学業相祥ニ申候
常憲院殿御代新規被召出候百
俵十人扶持被下此時母方苗字ニ改申
候以此兵法
大猷院殿御代ゟ軍鞍之役被仰付二拾俵
合百俵十人扶持○明暦二年十二月十
一日死大猷院之案

要人　八右衛門
明暦二年家督○御勘定ニ而百俵扶持
拾人扶持被召加合百俵十人扶持ニ成○
元禄七年十二月十三日死浅草長遠
法名某

要之　花之丞

元禄七年七月十二日家督 ○同八年
十二月十一日御勘定 ○正徳元年九月廿九日
御勘定組頭加役 百俵高弐百五拾俵ニ
成 ○享保二年二月十一日上方川筋
御普請御用ニ付而被遣 ○同年
七月廿六日帰府 ○同年八月廿日大
和川・木津川 御普請御用 ○同三年
四月十八日帰府 同月廿九日黄金
弐枚時服弐 ○同年十二月廿六日被

百俵合三百五拾俵 ○同十七年六月廿
三日病免小普請 ○同二十年十一月廿
六日死 六十六歳 同寺ニ葬

順成

左仲

實ハ 為常助秀次男
享保十二年八月十六日聟養子 ○
同年十二月廿六日家督 小普請

○寛保二年九月廿七日大御番。○
同三年同七月十八日西丸新御番。
○延享元年七月廿九日死。二十
三歳。法名了蘇

亟英

新次郎　致仕 正山

実ハ牛田長太郎頼安次男
延享元年十月二日為養子。家
督小普請。○寛延元年十二月廿
二日大御番。○宝暦二年四月六日新
御番。○同六年十二月廿八日西丸小
普請。○明和六年十二月四日致仕。

亟頼

左京　主馬

実ハ吉田四郎三郎安秀次男
明和六年十二月四日為養子。○同年

主膳同日家督○同九年十二月十八日
大御番○安永三年九月六日新御番
○同八年十二月廿八日病免小普請
○天明元年六月十二日西丸新番
○同六年閏六月十八日
差扣済○同六年同十月五日御赦
免勤○同八年八月廿三日大川筋御用於
水戸宇荷役同月十八日應合議役○
寛政二年正月五日病死行年五十歳

某
直義

同年小普請

熊太郎
寛政二年六月三日家督○同三年
七年十二月九日死行年二十三歳

某辰
新之丞

日本政府図書

直貞

実ハ吉田元亮直森次男
宝暦三年六月廿四日養子○同年
十月四日家督○同四年九月廿四日
小普請入 統初見○同六年三月廿日
中奥御用座浦宗嶋上覧人○同年
十月廿五日御前之大的上覧時服弐
○同七年六月御[illegible]之[illegible]

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan